

# 吉 良 城 跡 Ⅲ

1987.3

1987.3

高知県吾川郡春野町教育委員会

# 吉 良 城 跡 Ⅲ

1987.3

高知県吾川郡春野町教育委員会

## 序

近年高知県でも、中世城跡の調査が活発に行われているが、春野町においても59年度から5カ年の計画で発掘調査を実施し、城跡の内容及び性格の解明を図るとともに、町内史跡の保存検討を行なってきました。

先人の残してきた貴重な文化財を後世に伝えることは私達にあたえられた義務であり、本書はこうした状況の中で「吉良城跡発掘調査」として国及び県の補助を受け実施し、その成果をまとめたものであります。その結果、今回の調査においては、吉良氏屋敷跡の一部と考えられる具体的な遺構を確認することができ、又、県下における中世の城跡の発掘調査で土居と城跡の位置関係も明らかになったことは、今回の調査の大きな成果であり、今後の中世の城跡を探るうえで注目、期待されるものであると考えます。

今後は今までの調査を基礎として、調査の内容の整備充実を図る計画を考えており、今後とも国・県の温かいご指導、ご援助を切にお願いする次第であります。

最後に、このたびの調査対象地の地権者である石田正俊氏、松田弘美氏ご両人のご理解、ご協力に対し深甚の謝意を表しますとともに、この報告書作成に至るまで発掘調査全般にわたり適切なご助言ご指導下さいました、岡本健児先生、並びに高知県文化振興課の皆様方、又、地元関係者の方々に深く感謝とお礼申し上げ序といたします。

春野町教育長 小嶋正隆

## 例 言

1. 本書は、春野町教育委員会が国・県の補助を受けて昭和61年度に実施した吉良城跡発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、春野町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の指導を得て実施した。なお、発掘調査は高知県教育委員会文化振興課主事山本哲也が担当した。また、調査顧問岡本健児高松短期大学教授から、調査全般にわたって指導を得た。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図は国土地理院発行2万5千分の1（ごめん N 1-53-28-7-2）を複製使用し、第2図は1万の1高知広域都市計画図（春野町）を、また第3図は、高知県作成2,500分の1地図（高知広域都市圏73）を複製使用したものである。なお、方位は方眼北（G・N）とした。
4. 発掘区周辺の地形実測図及び造構平面図の方位は磁北とした。なお、造構実測図等のレベル高は海拔高度で、単位はメートルによるものである。また、遺物実測図は第18図を基縮尺にした他は、寸縮尺に統一した。
5. 本書の編集及び執筆は山本哲也が担当した。
6. 今回の発掘調査を通じて、地元関係者をはじめ多くの方々の御協力をいただいた。関係者各位に厚くお礼申し上げる。
7. 春野町教育長で、吉良城跡発掘調査団長であった川窪芳喜氏は、昭和62年1月3日に他界された。発掘調査中は、公務多忙のなかにも調査現場へ来られ、終始励ましの言葉と暖かい心遣いを寄せられた。吉良城跡発掘調査の先導者であり、またよき理解者であった故川窪芳喜氏の突然の訃報に、深く哀悼の意を捧げるとともに、御冥福を心からお祈り申しあげたい。

### （発掘調査体制）

団 長 川 窪 芳 喜（春野町教育長）  
副 団 長 池 上 孝 雄（春野町教育委員会社会教育課長）  
主任調査員 山 本 哲 也（高知県教育委員会文化振興課主事）  
調査員 下 村 公 彦（　　・　　・　　・　主幹）  
顧 問 岡 本 健 児（高松短期大学教授）  
総 務 近 泽 潤（春野町教育委員会社会教育課社会教育係長）  
春野町文化財保護審議会  
春野町文化財友の会

## 本文目次

序

例　　言

I 調査にいたる経緯 .....	1
II 吉良城跡と土居の概要 .....	1
1 吉　良　城　跡 .....	1
2 土　　　居 .....	3
III 調査の方法と経過 .....	5
IV 調　　査　　の　概　要 .....	7
1 調　　査　　の　内　容 .....	7
(1) 土居ノ谷地区 .....	7
(2) 大　　谷　　地　区 .....	11
2 検　　出　　遺　　構 .....	18
3 出　　土　　遺　　物 .....	21
V ま　　と　　め .....	32

## 掲 図 目 次

図 1 吉良城跡位置図	図10 トレンチ断面図
図 2 吉良城跡周辺図	図11 Aトレンチ石垣遺構検出状態
図 3 調査地点位置図	図12 Aトレンチ断面図
図 4 トレンチ設定図（土居ノ谷地区）	図13 Aトレンチ遺構配置図
図 5 トレンチ断面図	図14 出土遺物実測図1
図 6 タ	図15 タ 2
図 7 タ	図16 タ 3
図 8 タ	図17 タ 4
図 9 トレンチ設定図（大谷地区）	図18 タ 5

## 図 版 目 次

PL. 1 土居ノ谷地区遠景（北から） 同上 （北から）	Aトレンチ石垣遺構上集石状態（東から）
PL. 2 トレンチ設定状況（北東から） トレンチE～Gトレンチ（南東から）	PL. 14 石垣遺構（南から） 同上
PL. 3 Eトレンチ（南から） Fトレンチ（北西から）	PL. 15 ピット検出状況（南から） 同上 （東から）
PL. 4 Gトレンチ（北西から） 同上 （南西から）	PL. 16 Aトレンチピット検出状況（東北から） Aトレンチ東壁（北から）
PL. 5 Hトレンチ（南東から） Iトレンチ（南東から）	PL. 17 Aトレンチ完掘状態（北から） Aトレンチ石垣遺構北側（東から）
PL. 6 Gトレンチ北壁 Jトレンチ（北西から）	PL. 18 大谷地区遠景（北東から） 調査区近景（北西から）
PL. 7 Kトレンチ（北東から） 同上 （東から）	PL. 19 Iトレンチ（北から） 2トレンチ（東から）
PL. 8 G及びNトレンチ（南東から） Nトレンチ南壁	PL. 20 3及び4トレンチ（北西から） 3トレンチ茶臼出土状態（南東から）
PL. 9 Aトレンチ石組遺構（北西から） 同上 （南から）	PL. 21 出土遺物（土師質土器）
PL. 10 Aトレンチ石組遺構（西から） 同上 （東から）	PL. 22 タ
PL. 11 Aトレンチ石垣遺構検出状態（南西から） 同上 （西から）	PL. 23 タ （土師質土器、土鍤、砥石） PL. 24 タ （青磁） PL. 25 タ （白磁） PL. 26 タ （染付、近世陶磁器） PL. 27 タ （国産陶器） PL. 28 タ （土鍋、不明土製品及び鉄製品、瓦質土器）
PL. 12 石垣遺構検出状態（北東から） 同上 （西から）	
PL. 13 Aトレンチ石垣遺構上集石状態（南東から）	

## I 調査にいたる経緯

吉良城跡は、呉川郡春野町弘岡上に所在する中世の山城である。この城跡は、戦国時代土佐の七守護の一人であった吉良氏の居城で、土佐の戦国時代史を紐解く時、「吉良峰城」として登場し、著名な戦国武将であった吉良氏の興亡とともに語り継がれている城跡である。

城跡は、平地との比高差約100mを測る丘陵上に築城され、丘陵東側及び西側に急傾斜面をもち、また丘陵頂部を深い空堀によって二分する城構えが施されている。城跡の所在する丘陵の西麓には、「土居ノ谷」の小字名をもつ土地や、寺院址、重臣屋敷跡等に関連する小字名を冠した土地がみられ、城を中心とした政事的、軍事的中心集落が、城の西側谷部において存在していたことがうかがわれる。

春野町教育委員会では、この城跡について昭和35年に町指定史跡とし、保護措置を講じてきた。また、昭和52年度には城跡の一部が公有化された。その後、城跡の内容及び性格を明らかにしたうえで、史跡としての今後の保存方策を検討することを目的として、昭和59年度から5ヵ年計画で発掘調査が実施されている。

昭和59年度の発掘調査では、城跡の詰部の調査が実施され、また昭和60年度には「土居ノ谷」の小字名をもつ土地の一部が調査された。発掘調査の3年目にあたる本年度は、「土居ノ谷」と「大谷」の土地の一部について発掘調査を実施することとし、遺構の確認作業を行った。

調査対象地は、春野町弘岡上土居ノ谷1232番地及び弘岡上大谷1247番地、1250-1番地である。発掘調査は、地権者の石田正俊・松田弘美・石田勝己氏の承諾を得て、昭和61年10月14日から11月22日までの間に実施した。また、昭和61年11月21日には、調査成果についての現地説明会を実施した。

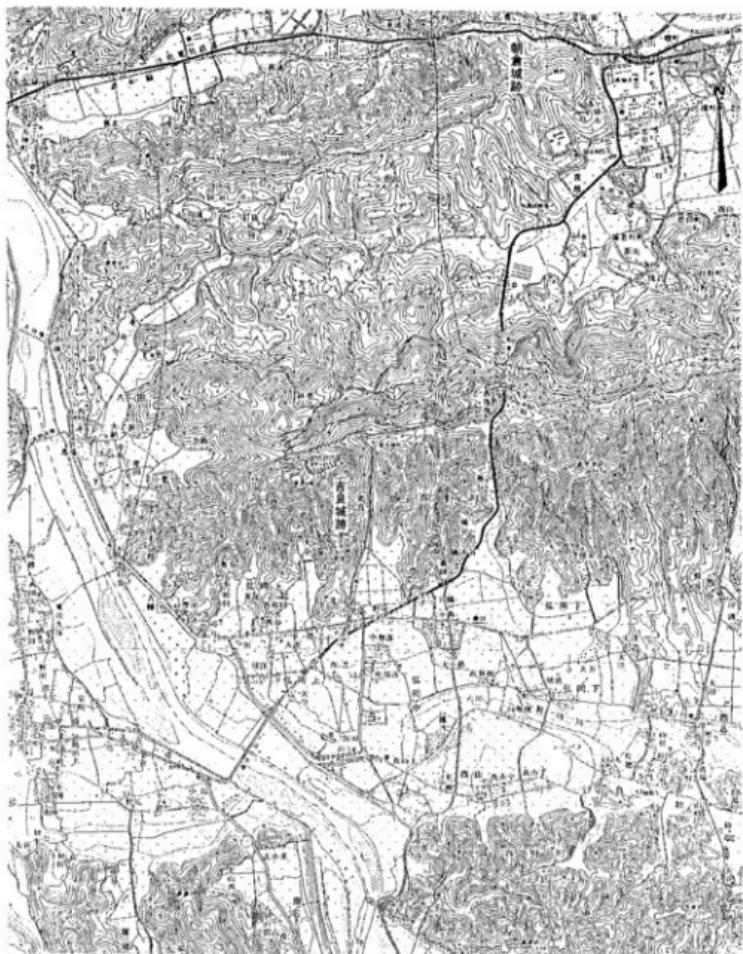
## II 吉良城跡と土居の概要

### 1. 吉良城跡

吉良城跡は、一級河川仁淀川の東部で標高249mの吉良ヶ峰から南東に派生する丘陵上に築かれており、春野町弘岡上古城4360番地に所在する。城跡の位置する丘陵頂部には、深い空堀が設けられ、丘陵頂部の平坦面は二分されている。この平坦面については、北側を『北嶺』、南側を『南嶺』と呼称している。城の詰部は北嶺にあり、詰南端部には台状地形が、また詰の周辺には堀切等がみられる。南嶺では、南嶺の北側に郭が、また西側に郭及び堀切等がみられる。昭和59年度に実施された発掘調査では詰部の調査が行われ、詰の周囲を巡る柱穴状ピット等が検出されている。また、15世紀及び16世紀に属する輸入陶磁器等が出土した。<sup>(1)</sup>

吉良氏

吉良氏の出自については明らかではないが、源頼朝の弟で平治の乱後に土佐に配流された源希



1:50,000

第1図 吉良城跡位置図

義の後裔と伝えられている。

吉良氏は、鎌倉時代に地頭として所領を有して以降、次第に勢力を浸透させて頭角を表わし、戦国時代には土佐の七守護の一人に数えられるまでになる。吉良氏の動向については、「吉良物語」<sup>(1)</sup>に詳しいが、吉良氏のなかで吉良宣経は、周防国山口から南村梅軒を招聘し土佐南学の塾を開いたことは有名である。天文9年(1540年)、吉良宣直の時代に、本山茂辰によって吉良城は落城し、吉良氏は滅んだ。本山茂辰はその後、吉良式部少輔茂辰を名乗るが、本山氏も永禄6年(1563年)に長宗我部元親によって敗退し、主城である朝倉城もこの時落城した。後、長宗我部元親の弟親貞は、新たに吉良家を再興し吉良氏を嗣ぐが、その子親実の時、元親の後嗣者問題で元親の怒りをかって親実は自刃する。天正16年(1588年)の事で、名門吉良家もここで途絶えるのである。

註 (1)『吉良城跡』春野町教育委員会 1985年3月

(2) 安芸氏、山田氏、本山氏、長宗我部氏、大平氏、津野氏、吉良氏。

(3) 土佐の城記物語文字で、真西堂知源が天正年間に書き残したものに、哲藏主、秋月山人が文意を付け加えたもの。

## 2. 土 居

春野町弘岡上字土居ノ谷1225~1228・1231~1233番地周辺は、土地の小字名が「土居ノ谷」で、現在、田・畑・山林及び雜種地となっている。「土居ノ谷」の総面積は、約5,800m<sup>2</sup>を測り、小字名が示すように両側を丘陵部ではさまれた谷部に位置している。城跡は、この「土居ノ谷」の東側丘陵上に所在し、「土居ノ谷」の北東部には城跡の北嶺と南嶺の境に通じる谷地形がみられる。「土居ノ谷」は、地名に「土居」が冠せられたように、城跡の屋敷跡が所在していた所であると考えられる場所で、「長宗我部地検帳」に記載された「御土居」もこの部分であったと推察されている。<sup>(1)</sup>

「土居ノ谷」は、四段からなる平坦な段状地形で、段状地形の境には砂岩の割石による石垣があり、また「土居ノ谷」の最奥部には五輪塔をもつ方形基壇の墓地が現存している。「土居ノ谷」からは、中・近世に属する土器片を表面採集することができる。

昭和60年度の発掘調査では、「土居ノ谷」の谷入口部が調査対象地となり(春野町弘岡上字土居ノ谷1225~1233番地)、中世の遺構は検出されなかったものの、16世紀に比定される輸入陶磁器等が出土し、発掘区の周辺に遺構が形成されている可能性がうかがわれた。

本年度の発掘調査は、昭和60年度に統いて「土居ノ谷」を調査対象地とし、「土居ノ谷」の谷奥部に発掘区を設定した。調査の結果、吉良氏の屋敷跡の一部であると考えられる遺構が検出され、「土居ノ谷」が、いわゆる城跡の土居であったことが明らかとなった。

吉良城跡の土居跡については、小島祐馬京大名誉教授により復元的な考察が行われており、二ノ堀、中門、外門、三ノ堀、堀、屋敷跡等が土居を構成する主要な施設であったことが考究されている。今回の調査で検出された遺構が、土居のどの部分に相当するかを明らかにするためには、今後の発掘調査を通じて検証していく作業が前提となるものと考えられる。

註 (1)『吉良城跡』春野町教育委員会 1985年3月

(2)『吉良城跡』春野町教育委員会 1985年3月

『高知県春野町中世の城跡』春野町教育委員会 1985年3月



1:20,000

第2図 吉良城跡周辺図

### III 調査の方法と経過

今回の発掘調査対象地は、春野町弘岡上土居ノ谷及び大谷の土地の一部である。調査の便宜上、土地の小字名を使用して「土居ノ谷」と「大谷」地区とに調査区を区分することにした。

#### 土居ノ谷地区

調査対象地は、「土居ノ谷」の西側谷奥部に位置する段状の平坦地で、行政地番は春野町弘岡上土居ノ谷1233番地である。土地の総面積は約1,300m<sup>2</sup>で、三段の段状地形を呈している。最奥部の段状地形を上段とすれば、上段及び中段が面積的に最も広く、調査前は竹林となっていた。また下段は、谷奥部の入口部に接する平坦地で、中段との比高差は約2.30mを測る。上・中・下の各段とも段の境には石垣が設けられ、中段と下段の境の石垣は土居ノ谷地区のなかで最も高い石垣を呈する。調査対象地の標高は、上段が標高16~17m、中段が標高15m前後、下段が標高12m前後である。なお、上段及び中段の西側は、南西に派生する丘陵の斜面部に接しており、下段の北側は、丘陵の南端底部に接している。また、調査対象地の東側は、やや東に傾斜する平坦地となっており、現在柿畠となっている。上段及び中段と柿畠は、南北方向の小排水路によって区分されている。

発掘区は、上段及び中段の竹林を伐採した後、磁北に対して東へ45°振った基本線を基に、地形に合わせて任意の間隔でトレンチを設定した。各トレンチには、発掘区の区分をするためにA~Kまでの名称を冠した。トレンチは、上段に1ヶ所、中段に9ヶ所、下段に1ヶ所の計11ヶ所で、上段及び中段のトレンチは調査状況に伴って発掘区の拡幅を行った。

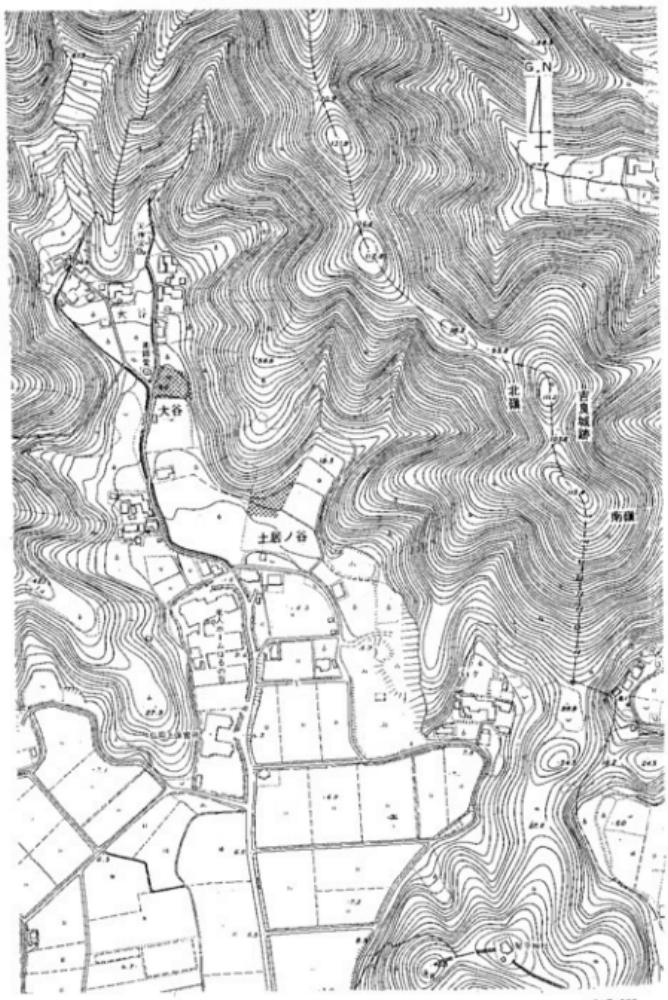
発掘調査は、表土及び耕作土を重機を使用して除去した後、人力で遺構及び遺物包含層の検出を行った。また、測量調査は、昭和60年度の発掘調査時に設定された測量杭（標高14.29m）を基本杭とし、測量用の杭を新たに設けた。なお、Aトレンチで検出された遺構については、遺方測量で縮尺品の遺構平面図を作成した。その他のトレンチについては、現地で設定した調査用の基本線を利用し、平板測量等を実施した。

調査は、昭和61年10月14日から11月22日までの38日間で、11月22日に埋め戻し作業を実施し、総ての調査を終了した。総発掘面積は約300m<sup>2</sup>である。（図3・4）

#### 大谷地区

調査対象地は、「大谷」の谷奥部に位置する平坦地で、行政地番は春野町弘岡上大谷1247及び、1250-1番地である。土地の総面積は約890m<sup>2</sup>で、このうち80m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。調査対象地の高さは、標高16~18mで、東側は南西に派生する丘陵の西側斜面部に接している。また、調査対象地の北西部には薬師堂が所在し、東側部は大谷地区の墓地となっている。

調査は、対象地に4ヶ所のトレンチを設けて発掘区とし、重機を使用して表土等を除去した後、人力によって遺構及び遺物包含層の確認作業を実施した。トレンチについては、1~4トレンチの名称を冠した。発掘調査は昭和61年11月4日に開始し、11月22日に埋め戻しを行った。（図3・9）



第3図 調査地點位置図

## IV 調査の概要

### 1. 調査の内容

#### (1) 土居ノ谷地区 (図4)

今回の発掘調査で、石垣遺構、柱穴群、石組遺構、土壘状遺構等が検出され、中世の具体的な遺構が確認された。検出された遺構は、Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチで発見されたもので、その他のトレンチからは土居ノ谷地区の旧地形をうかがうことのできる資料を得ることができた。各トレンチの調査内容をまとめて、調査の概要にふれることにしたい。

#### 各トレンチの調査概要 (図5~8)

##### Aトレンチ

土居ノ谷地区の西側奥部に設けた発掘区で、遺構の検出に伴って拡幅した。トレンチ北側は、段状の平坦地形の上段部にあたり、この部分で石垣遺構の上部が検出されたため、トレンチを南側に延長した。

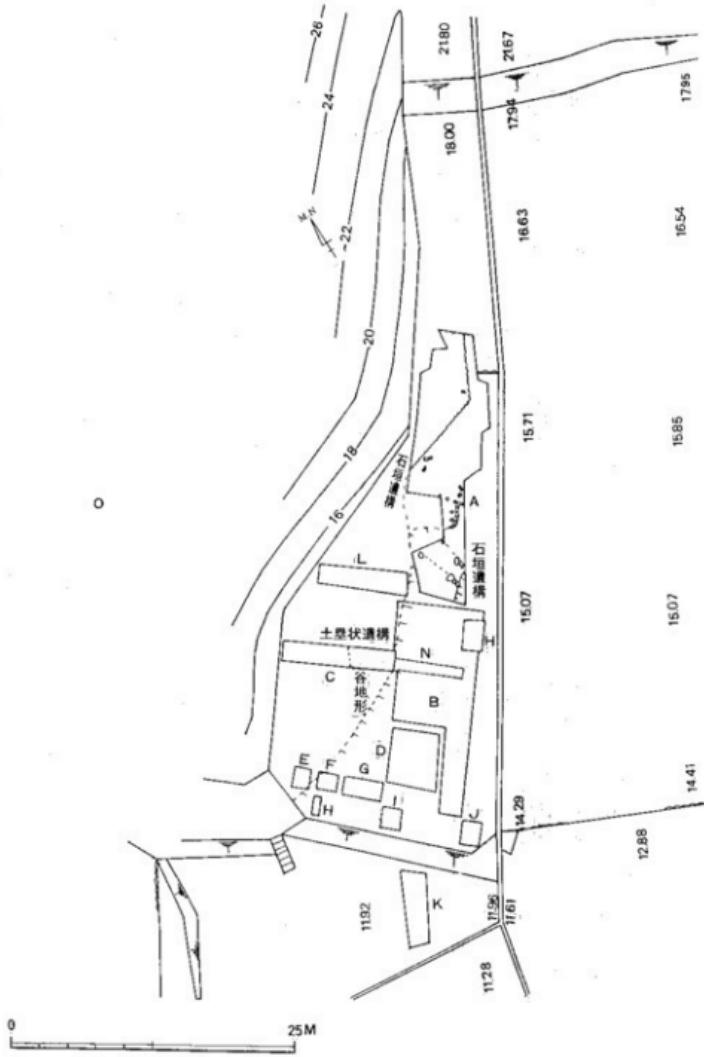
基本層序は、第1層表土で褐色腐植土、第2層茶褐色粘礫土、第3層褐色粘礫土、第4層黄褐色粘礫土、第5層黄褐色礫土（岩盤）である。このうち、第2層からは、土師質土器片、近世陶磁器片が出土し、第3層及び第4層からは、輸入陶磁器片、備前焼壺片等の中世に属する遺物が出土した。なお、トレンチの南端で検出された石組遺構周辺では、第3層下が、第4層灰色粘礫土、第5層黒褐色粘礫土、第6層黄茶色粘礫土、第7層茶色礫土となっており、第8層が黄褐色粘礫土（地山上）である。このうち、第6層及び第7層は、東側へ傾斜して堆積している状況を呈しており、第8層もかなりの傾斜で東側へ落ち込んでいた。土層断面の観察からは、旧地形は谷の東側斜面であったことがうかがわれ、第8層上に構築されている石組遺構は、谷への排水機能をもった溝跡の端部であることが考えられる。

トレンチ北側で検出された石垣遺構は、第2層下で検出されたもので、石垣遺構の周囲には、第3層が厚く堆積していた。また、柱穴跡は第8層に直接掘りこまれたものであり、淡黄褐色粘礫土が堆積していた。

##### Bトレンチ

Aトレンチの南側に設定した発掘区で、発掘区のなかにさらに小発掘区を設けて、Mトレンチ及びNトレンチとした。

基本層序は、第1層表土で褐色腐植土、第2層淡茶褐色粘礫土、第3層茶褐色粘礫土である。Mトレンチ及びNトレンチの調査成果から明らかのように、Bトレンチの第3層下は東側へ傾斜する谷地形への堆積土であり、Bトレンチの旧地形は、谷地形の東側斜面であったことが判明した。Bトレンチからは、第2層中から少量の土師質土器片が出土したが、中・近世の遺構は検出されなかった。



第4図 トレンチ設定図 (土居ノ台地区)

### C トレンチ

B トレンチの西側で、N トレンチに続く発掘区である。幅 2m 長さ 10m のトレンチで、土層断面の観察から土壌状造構が確認された。

基本層序は、第 1 層表土で褐色腐植土、第 2 層淡茶褐色粘礫土、第 3 層茶色粘礫土、第 4 層黄褐色礫土で、第 4 層下は黒褐色粘質土となる。地山土は黄茶色粘質土で、トレンチ西端では第 3 層下で地山土となっている。またトレンチ中央部から東端にかけては、黒褐色粘質土下が地山土となっている。堆積土のうち黒褐色粘質土は、断面がかまぼこ型を呈しており、黒色土と黄褐色土を交互に叩きしめた版築状の整地土である。黒褐色粘質土上面には、土師質土器片が散布しており、土層堆積状況からみて、土壌状造構の基底部であると考えられる。また、C トレンチの東端は、東側へ傾斜する斜面の肩部に該当し、谷地形への落ち口であったことがうかがわれる。

### D トレンチ

B トレンチの南側に設けた幅 4m 長さ 5m の発掘区である。基本層序は、B トレンチと同一であり、旧地形は谷地形の斜面部であったものと考えられる。

第 2 層淡茶褐色粘礫土中から、土師質土器片が出土したが、中・近世に属する遺構は検出されなかった。なお、第 2 層下では砂岩の割石が数片散在して検出されたが、検出状態からみて建物址等に伴う礎石とは考え難く、第 2 層中へ混入したものと判断された。

### E トレンチ

調査対象地の南側に設けた、幅 1.5m 長さ 1.8m の発掘区である。基本層序は、第 1 層表土で褐色腐植土、第 2 層褐色砂礫土、第 3 層黄褐色礫土で地山（岩盤）となっている。遺構及び遺物包含層は検出されなかった。

### F トレンチ

E トレンチの東側に設定した、幅 1.8m 長さ 1.6m の発掘区である。基本層序は、第 1 層表土で褐色腐植土、第 2 層褐色砂礫土、第 3 層茶褐色砂礫土、第 4 層茶褐色粘礫土となっている。このなかで第 3 層中からは土師質土器片が出土した。

### G トレンチ

E 及び F トレンチに統けて設定した、幅 1.6m 長さ 3.4m の発掘区である。基本層序は、第 1 層～第 4 層までが F トレンチと同一であり、第 5 層茶褐色粘礫土、第 6 層明茶色粘礫土、第 7 層黒褐色粘礫土、第 8 層茶色粘礫土、第 9 層暗褐色粘礫土、第 10 層黄茶褐色粘礫土、第 11 層褐色粘礫土、第 12 層明茶色粘礫土、第 13 層淡茶色礫土、第 14 層褐色粘質土で地山土である。堆積土のうち、第 8 層から第 13 層までは、東に傾斜して堆積しており、地山土も同様な傾斜をもっている。また、トレンチの東壁では、南側へ傾斜して堆積している土層序がみられ、全体的に東南方向へ傾斜して堆積していることがわかる。この土層堆積状況は、G トレンチの旧地形が東へ傾斜した谷地形であったことを示しており、第 10 層から第 13 層にかけては、かなり強い勾

配が存在していたことを表わしているものと考えられる。

Gトレンチでは、第11層から第13層にかけて土師質土器・輸入陶磁器等が出土した。なかでも第11層中からは、約120点ばかりの土師質土器片が多量に出土し、瓦質土器・砥石等も出土した。また、第11層中には、炭化物の混入が多く認められた。

#### Hトレンチ

Fトレンチの南側に設定した、幅0.6m長さ1.6mの小発掘区である。第6層に区分される堆積土がみられ、トレンチ南端では、地表下約85cmで石垣の裏込めと考えられる褐色礫土が堆積していた。また、茶褐色砂礫土は南側へ傾斜して堆積していることが観察され、Hトレンチ南側の石垣は、茶褐色砂礫土をベースにして構築されていることが判明した。周辺のトレンチの土層堆積状況と比較して検討した結果、石垣の構築は比較的新しく、旧地形である谷地形が埋もれてから以降のものであり、その時期は近世以降である可能性が強い。

#### Iトレンチ

Hトレンチと同様に、南北方向に設定した発掘区で、幅1.8m長さ1.8mを測る。トレンチ内の堆積土のうち、茶褐色粘礫土は南側へ傾斜して堆積しており、輸入陶磁器片（青磁・白磁）が出土した。

#### Jトレンチ

Bトレンチの南側に設けた、幅1.8m長さ2.2mの発掘区である。第5層に区分される堆積土がみられ、このうち赤褐色粘礫土は南側へ傾斜して堆積していた。赤褐色粘礫土の上層である茶色砂質土からは、土師質土器片が出土した。

#### Kトレンチ

調査対象地の南端に設定した、幅2.0m長さ6.2mの発掘区である。第4層に区分される堆積土がみられ、第1層表土で褐色腐植土、第2層灰茶色粘礫土、第3層茶褐色粘礫土、第4層黄茶褐色粘礫土となっている。第2層及び第3層からは、土師質土器の細片及び近世の陶磁器片が出土した。また、トレンチ南西端には、第4層上に割石による集石がみられた。この集石については、性格を明らかにするにたる出土遺物等がなく、内容は不明である。

#### Lトレンチ

Cトレンチの北側に設定した、幅1.8m長さ7.8mの発掘区である。基本層序は、Aトレンチ南端の土層序と同じであるが、Cトレンチで確認された土壘状遺構は、本発掘区では検出されなかった。

#### Mトレンチ

Bトレンチ内に設定した小発掘区で、幅1.8m長さ2.6mを測る。第7層に区分される堆積土がみられ、第1層表土で褐色腐植土、第2層淡茶色粘礫土、第3層茶褐色粘礫土、第4層褐色粘礫土、第5層褐色礫土、第6層茶色砂礫土、第7層黒褐色粘礫土が基本層序となっている。堆積土のなかで、第5層中からは、備前焼片口鉢片が出土し、中世の遺物が含まれていた。ま

た、第5層は、南側へ傾斜して堆積しており、旧地形は南東方向へ傾斜した谷地形であることが判明した。

#### Nトレチ

Cトレチに接して東側へ延長したトレチで、Bトレチ内に設定した小発掘区である。このトレチは、土壘状造構の東側について土層堆積状況を観察し併せてBトレチの層序を補足する目的で設定したもので、幅1m長さ6mを測る。

堆積土は、第3層茶褐色粘礫土の下層から東へ傾斜して堆積しており、Cトレチ側の堆積土は急な勾配で東側に傾斜していることが判明した。土層の断面観察から、Nトレチの旧地形は、東側へ傾斜する谷地形であったことが判明し、地表下約1.6mまで掘り下げたにもかかわらず谷底は検出されないことから、かなり深い谷地形であったことが確認された。また、堆積土は、粘礫土と粘砂土が数層にわたって流れ込んでおり、谷地形へ数回にわたって多量の土砂が流入したものと考えられる。

なお、第10層～第12層は硬質で緻密な粘質土であり、谷地形の基盤土であったものと考える。

#### (2) 大谷地区 (図10)

大谷地区では、中世に属する造構及び遺物包含層は検出されなかったものの、発掘区の一部から土師質土器片及び茶臼片が出土し、調査対象地の周辺に中世の造構が形成されている可能性が考えられる。また、各トレチの内容から本調査地点は、谷筋であったことが判明した。

#### 各トレチの調査概要

##### 1トレチ

調査対象地の西側に設けた南北方向の発掘区で、幅1.0m長さ4.4mを測る。層序は、6層に区分されるもので、粘礫土及び礫土が堆積していた。トレチ南側には、自然流路とみられる落ち込みがみられ、第3層が堆積していた。

##### 2トレチ

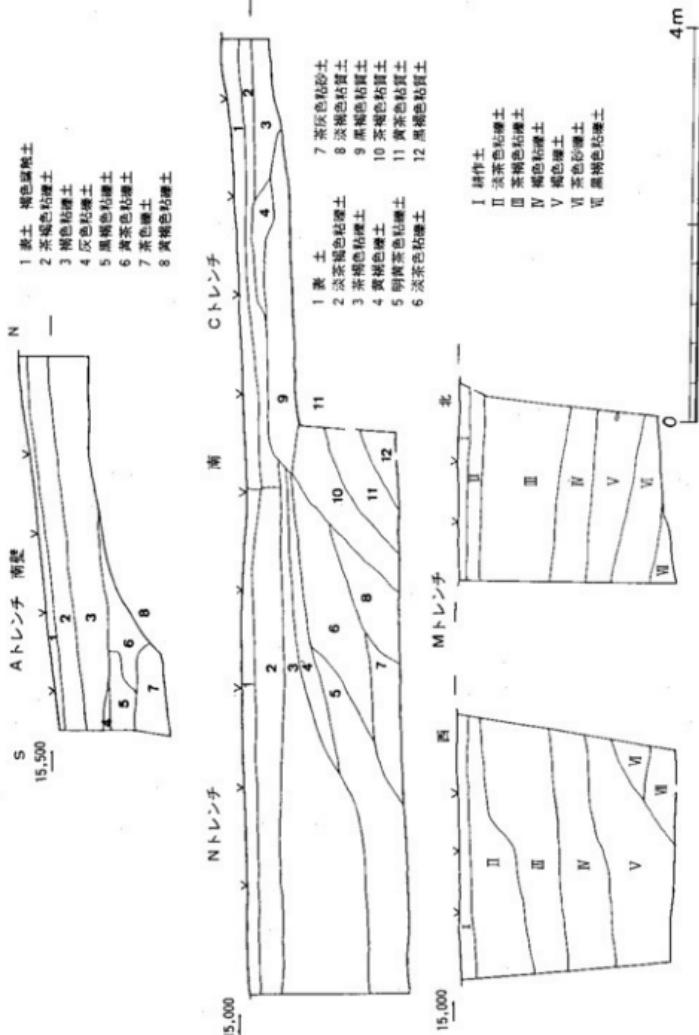
1トレチ東側に設定した、幅1.0m長さ1.4mの発掘区である。堆積土は、粘礫土が主で、土質及び色調の相違から6層に区分される。トレチ南壁に、自然流路の痕跡が認められる。

##### 3トレチ

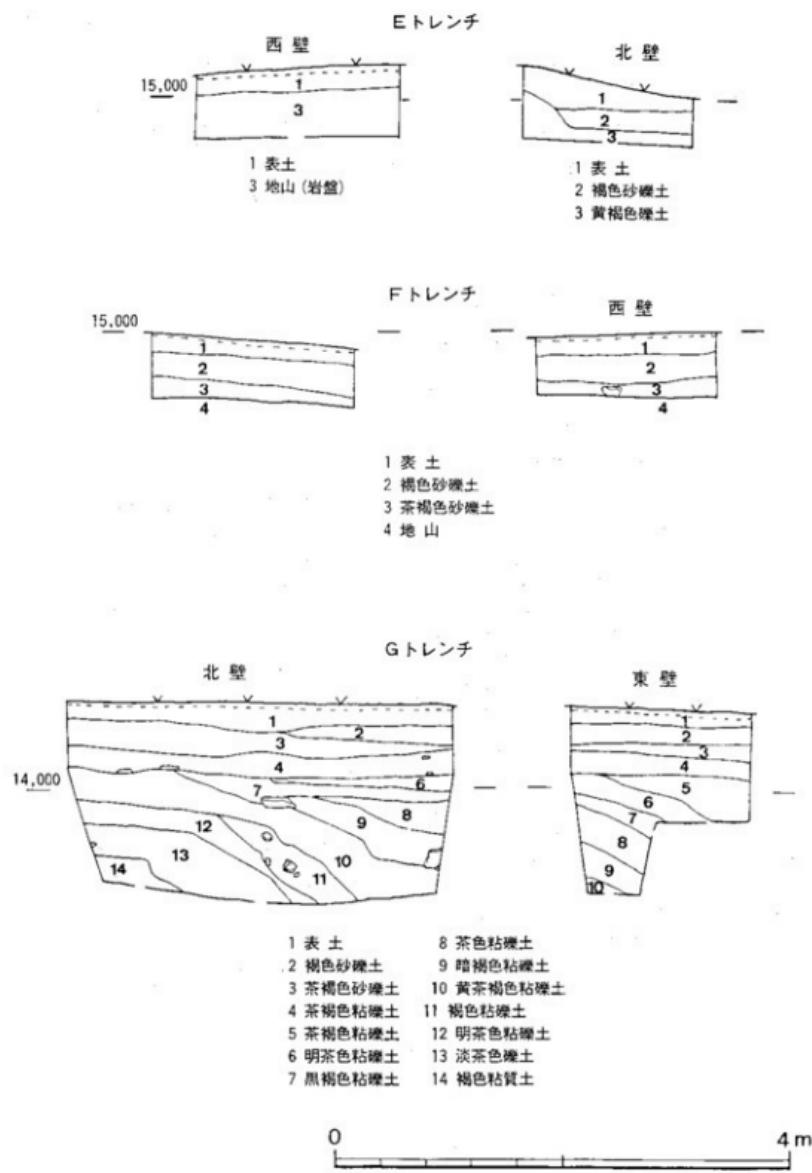
南北方向の発掘区で、幅1m長さ9mを測る。5層に区分される堆積土がみられ、トレチ北端の第2層下、第3層上面で茶臼が出土した。また、第2層中から土師質土器の細片が出土した。堆積土のうち、第3層以下は大型の礫を含む粘礫土及び礫土で、旧河床であったものと考えられる。

#### 4 トレンチ

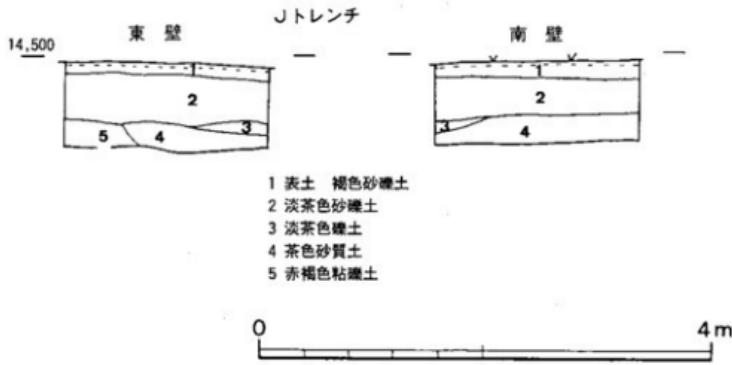
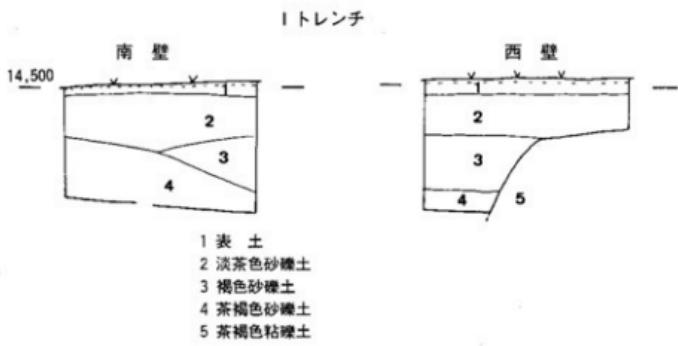
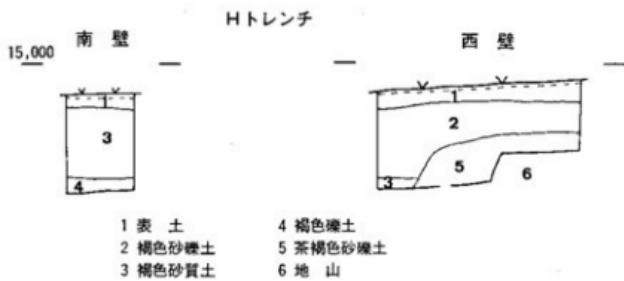
3 トレンチに直交する東西方向の発掘区で、幅1.0m長さ5.0mを測る。層序は4層に区分されるもので、粘礫土及び礫が主に堆積していた。トレンチ北壁には、自然流路と考えられる落ち込みがみられ、第4層灰茶色礫土は、旧河床であったものと考えられる。



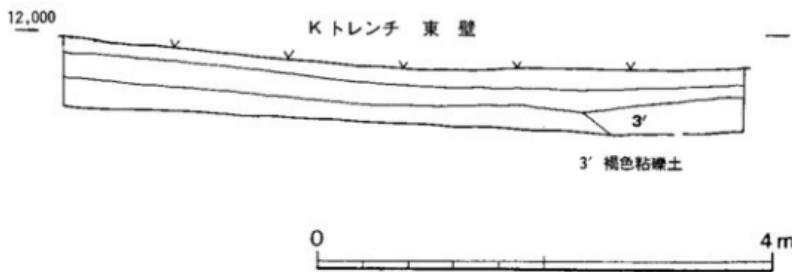
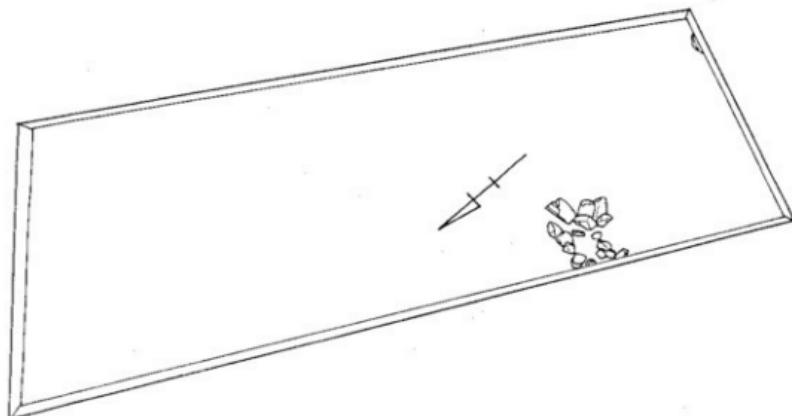
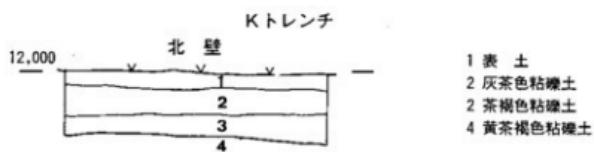
第5図 トレンチ断面図



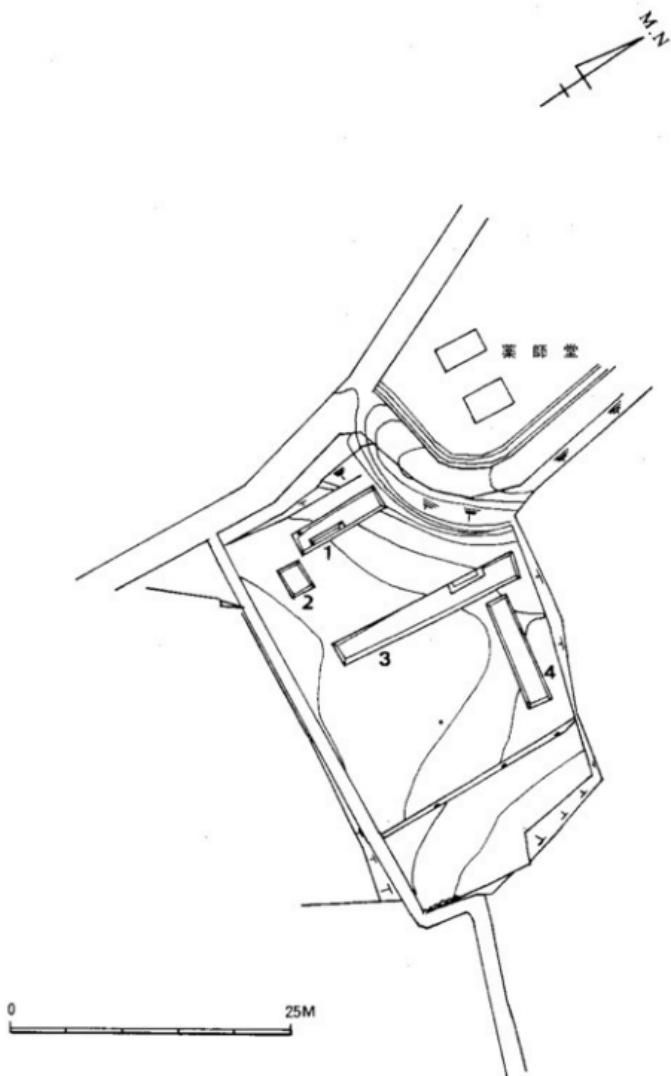
第6図 トレンチ断面図



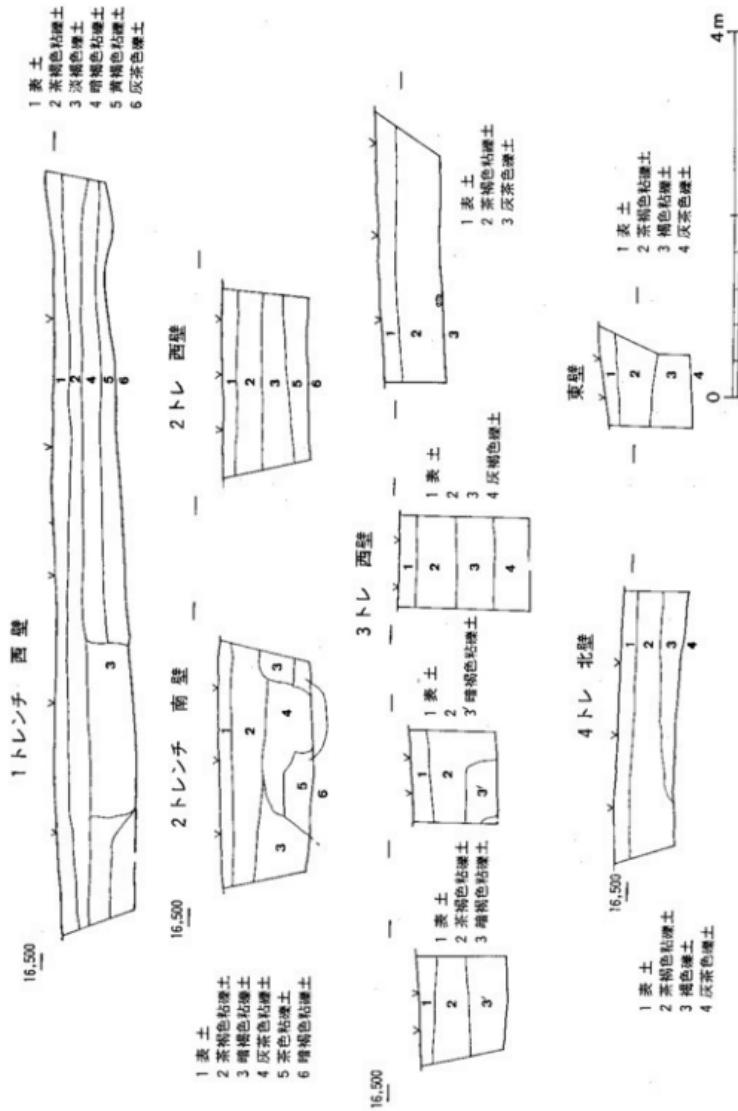
第7図 トレンチ断面図



第8図 トレンチ断面図



第9図 トレンチ設定図（大谷地区）



第10図 レンチ断面図

## 2. 検出遺構 (図13)

土居ノ谷地区及び大谷地区の調査において検出された遺構は、以下のとおりである。

石垣遺構1、柱穴7個、石組遺構1、土壘状遺構1

遺構は総て、土居ノ谷地区から検出されたもので、土居ノ谷地区に設定した発掘区であるAトレンチ及びCトレンチにおいて確認された。なお、この他に、Kトレンチで検出された性格不明の集石や、Hトレンチ及びIトレンチで検出した段状の落ち込みが人為的に形成された遺構である可能性をもつが、中世に属する明確な遺構ではなく、近世以降に形成されたものであると考えられる。

### 石垣 遺構

Aトレンチ北部で検出された石組みで、石垣状を呈することから、石垣遺構と呼称することとした。砂岩及び石灰岩の割石を2~3段に据え、割石の隙間は小礫で充填しており、補強用の裏込めが施されている。隅角にはやや大きめの石灰岩が使用され、隅石となっている。現在高は約50cmを測り、隅石を境にして北東方向へ約5m、西へ約8mの長さをもつ。石垣遺構の内側及び外側は地山土（岩盤）で、楕円状の平坦面である。また、石垣遺構の周囲には、ピット及び礫石状の板石（このうちの1箇は切石）がみられる。石垣遺構は、Aトレンチの第2層下で検出され、遺構の外周には第3層及び第4層が堆積していた。第3層及び第4層中からは、青磁・白磁・青白磁・染付等の輸入陶磁器片をはじめ、備前焼壺片・甕片・土師質土器片等が出土した。なお、石垣遺構の北端部では、第2層下から近世陶磁器片が出土しており、石組みも乱れていることから、近世以降のかく乱が著しかったものと判断される。また、石垣遺構隅角部の上部からは、小礫が集中して検出され、備前焼壺片・石臼・土師質土器片が出土した。

### 柱 穴

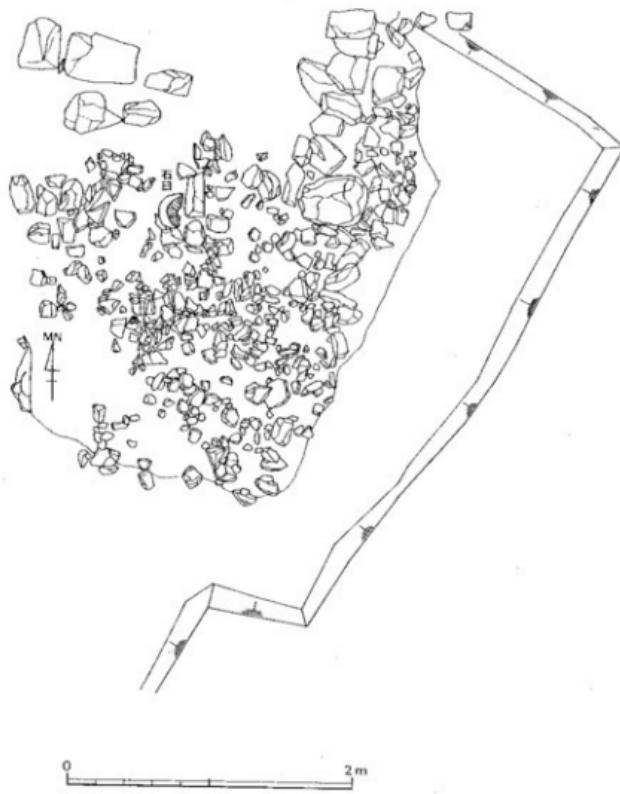
石垣遺構の隅角部及びAトレンチ中央部で検出されたピットで、柱穴跡と考えられる。直径25~35cm、深さ14~30cmを測る。地山土（岩盤）に掘り込まれており、淡黄褐色粘土が埋土であった。ピットの一部からは、青磁片・土師質土器片が出土した。遺構の性格については、検出範囲が小範囲であることから明確にできないが、石垣遺構に伴うものとそれ以外のものとの二群に大別することが可能である。

### 石組 遺構

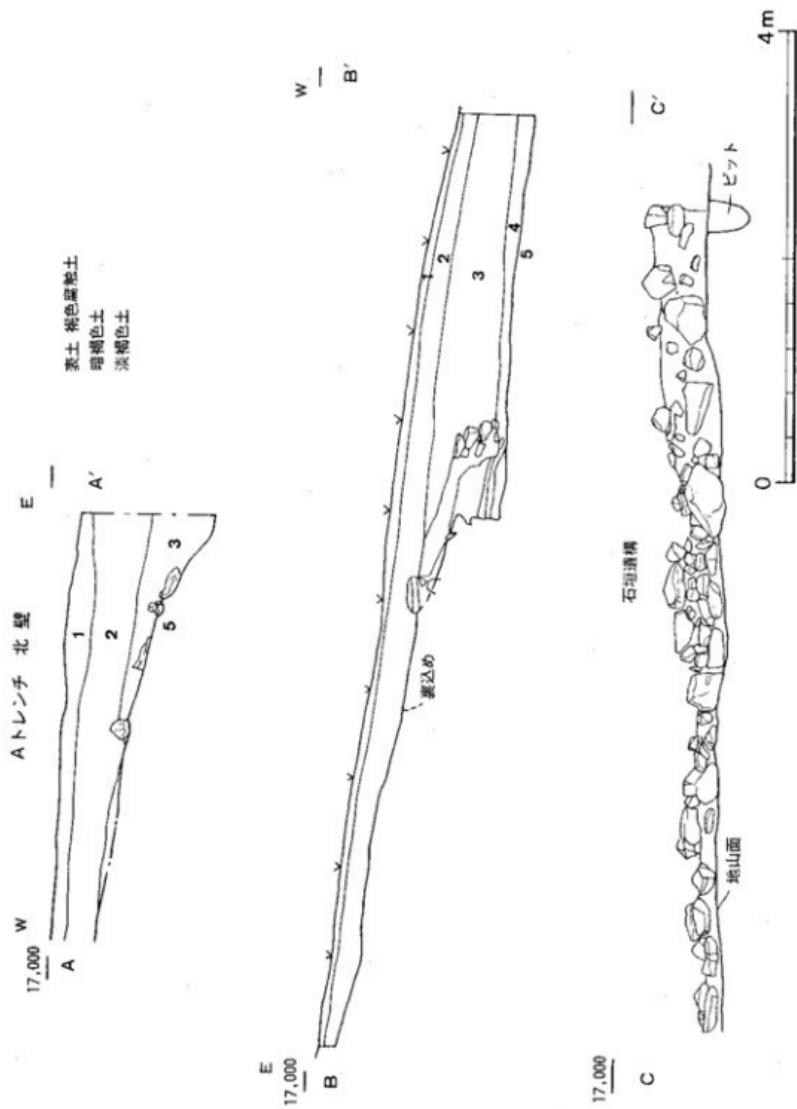
Aトレンチ南で検出された石組みで、幅60cm長さ60cm程度の比較的大きな石を使用して組み合せたものである。使用された石材は、石灰岩及び砂岩である。石組みの内幅は、0.8m~1.0mで、二石または三石の石を並べている。北側にかけて、石列が続いていることも考えられるが、石の抜き取り痕等は検出されなかった。また、検出された石組みは、一段だけであった。谷地形への落ち口に位置することから、排水機能を有した施設であると推測される。

### 土壘状遺構

Cトレンチ中央部で検出された版築状の整地土で、土壘状遺構の基底部であると考えられる。



第11図 Aトレンチ石垣遺構検出状態



第12図 Aトレンチ断面図

下端の幅3.5m、上端の幅は2.5mで、高さ25cmを測る。地山土（黄茶色粘質土）の上面に盛られたもので、上部は後世の削平を受けて消失している。僅かに、蒲鉾型の断面を呈する。谷地形の肩部に位置しており、南北方向に形成されていたことが考えられるが、トレンチ及びE～Gトレンチでは、検出されなかった。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土居ノ谷地区Aトレンチ及びFGトレンチから出土したもののが大半であった。内容は以下のとおりである。

土師質土器	杯・皿・土鍋	国産陶器	
瓦質土器	鉢	備前焼	壺・甕・鉢
輸入陶磁器		近世陶磁器	壺・甕・皿
青磁	碗・皿	鉄製品	不明鉄製品
白磁	碗・皿	土製品	土鍋・不明土製品
青白磁	碗	石製品	茶臼・石臼・砥石
染付	皿		

#### 土師質土器 (図14-1～35、図15-36～72)

土居ノ谷地区Aトレンチ及びGトレンチから多量に出土した。特に、Gトレンチでは第11層中から、約120点余の土器片が集中して出土した。また、土居ノ谷地区B・D・F・J・Kトレンチ及び大谷地区3トレンチからは、細片の土器片が出土した。

出土した土器は、口縁部又は底部の破片が多く、完形に近い形のものはごく僅かであった。なお、土器については、器形及び法量から数類に分類することが可能であった。

##### 杯 (1～4、10～72)

杯a 口径9.5～10.2cm、器高2.9～3.5cmのもので、直線的な体部をもち、口縁端は丸くおさまる。(1～3)

杯b 口径12.2cm、器高3.5cmのもので、直線的な体部をもち、口径の大きなもの。(46、47)

杯は、a類及びb類に2分されるが、体部を欠き口縁部及び底部しか残存しなかったものについては、口縁径が7.2～8.0cmのもの(10、11)及び11.4～12.3cmのもの(12、13)、底径が4.3～5.0cmでAトレンチ出土のもの(14～22)及びGトレンチ出土のもの(36～48)、底径が5.4～7.4cmでAトレンチ出土のもの(23～35)及びGトレンチ出土のもの(49～72)に分類される。

##### 皿 (5～9)

皿a 口径6.0～6.4cm、器高1.3～1.6cmで、体部が短かく端部が丸みをもつ。(5～7)

皿b 口径7.8～7.9cm、器高1.5～2.2cmで、口縁端部が尖る。(8、9)

出土土器は総てロクロ成形で、手捏ねはみられない。また、磨耗が著しかったが、土器底部に回転糸切り痕を明瞭に残すものがある。

#### 鍋 (図17-96)

口縁部は内傾し、端部は内傾した面をもつ鍋で、胴部外面に叩き目を施す。Gトレンチ第11層から出土した。

#### 瓦質土器 (図17-101)

##### 鉢 (101)

体部は「字型に内湾し、口縁端上面は平坦な面をもつ。体部の上端に2条の突帯をもち突帯の間には唐草文のスタンプがある。方形を呈する鉢で、火鉢としての使用例を考えられる。Gトレンチ第11層中から出土した。

#### 輸入陶磁器 (図16-73~88)

##### 青磁 (73~78)

##### 碗 (73~76)

73・74は細蓮弁文を外面にもつ碗である。口縁端は丸みをもつ。76は、ヘラ描きの雷文帯がみられる。73はIトレンチから、他はAトレンチから出土した。

##### 皿 (77~78)

77は口縁が外反する無文の皿である。78は皿の高台部で、内面には印花文が施されている。

##### 白磁 (図16-79~85)

##### 皿 (79~86)

口縁が内湾するもの (81~83、85) と、外湾するもの (79、80、85) に分けられる。79は高台内まで施釉されるが、81・82・83は体部下半が施釉されず高台部は、アーチ状を呈するものもある。84は、体部下半の破片で、花文が外面にみられる。79、81~83はGトレンチ第11層から出土した。また80・85はAトレンチから出土した。

##### 青白磁 (図16-86)

##### 皿 (86)

内湾する口縁をもち、端部は尖りぎみにおわる。白色堅緻な胎土をもち、釉は透明度の強い青色を呈する。Gトレンチ第11層中から出土した。

##### 染付 (図16-87・88)

##### 皿 (87・88)

87は、内面口縁端に一重、見込みに二重の界線を、外面口縁端に一重、体部下半に細い一重の界線を有する。外面には、唐草文を有する。胎土は白色でやや粗く、濁藍色の呉服

をもつ。88は、内外面の口縁部に一重の界線を、内面の見込み及び高台外側部に二重の界線をもつ。また、外面にはつる草文を有する。胎土は白色でやや荒く、透明度の高い釉がかかり、呉須は淡藍色である。Aトレンチ第3層及び第4層中から出土した。

#### 国産陶器 (図17-97~99)

##### 壺 (97)

壺底部で、系切底をもち、内外面にロクロナデがみられる。内面には自然釉が付着している。胎土は緻密で、内外面とも色調は淡灰色を呈する。産地不明であるが、器形及び成形技法からみて、中世前半に属する遺物であると考えられる。Gトレンチから出土した。

##### 備前 (98・99)

98は、壺肩部片で、外面に三条の条線による波伏文を有する。胎土は緻密で、外面には自然釉が付着する。Aトレンチで検出された石垣遺構の隅角で、集石中から出土した。99は、片口の鉢片であり、焼成時のゆがみがみられる。Gトレンチから出土した。また、PL27の99'は、Dトレンチから出土した片口の鉢片である。

#### 近世陶磁器 (図16-89~95)

土居ノ谷地区Iトレンチ第2層から出土した遺物(90)及び表面採集された遺物で、徳利(89)、碗(90~92・94・95)、皿(93)である。調査対象地の開墾時や調査対象地西側の丘陵斜面に所在する近世墓の造墓時に、持ち込まれたものと考えられる。

#### 鉄製品 (図17-105)

石垣遺構南側の堆積土中から出土した。先端は楔状で、頭部は袋状になっている。近世以降の遺物である可能性もあるが、遺構の周辺から出土した鉄製品であるので、出土遺物の一部として扱うこととした。重さは約100gを測る。

#### 土製品 (図17-100・102~104)

##### 土鍤 (102~104)

Aトレンチ北側の石垣遺構周辺から出土した。102及び104は、胴中央部に膨らみを持つ。全体的に色調は赤褐色で、軟質である。

##### 不明土製品 (100)

石垣遺構上の集石部から出土した。形状から、盤状の土製品の脚部であると考えられる。色調は赤褐色を呈する。

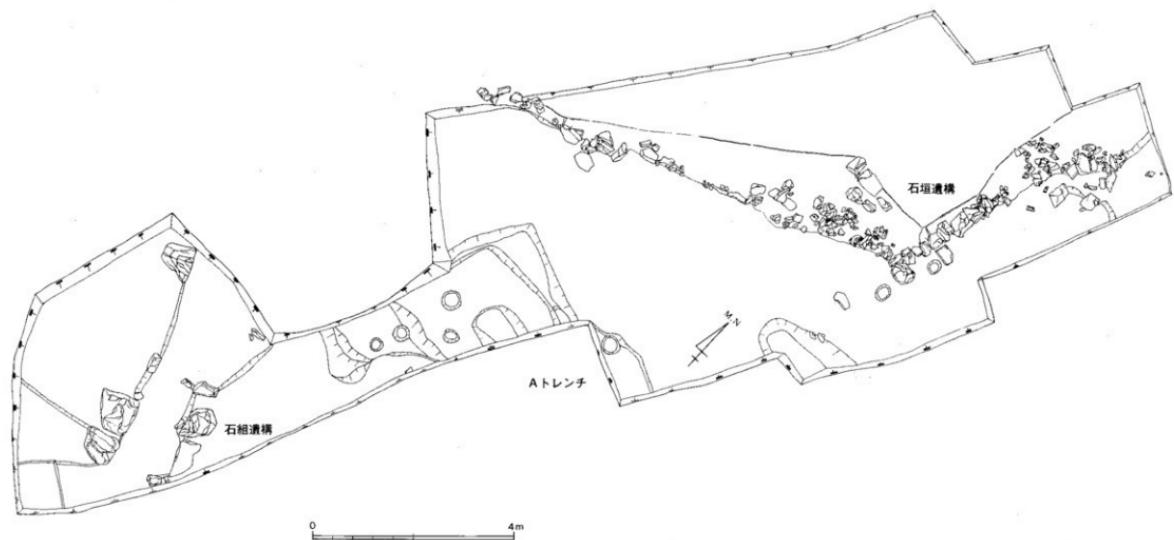
#### 石製品 (図17-106・図18-107・108)

##### 砥石 (図17-106)

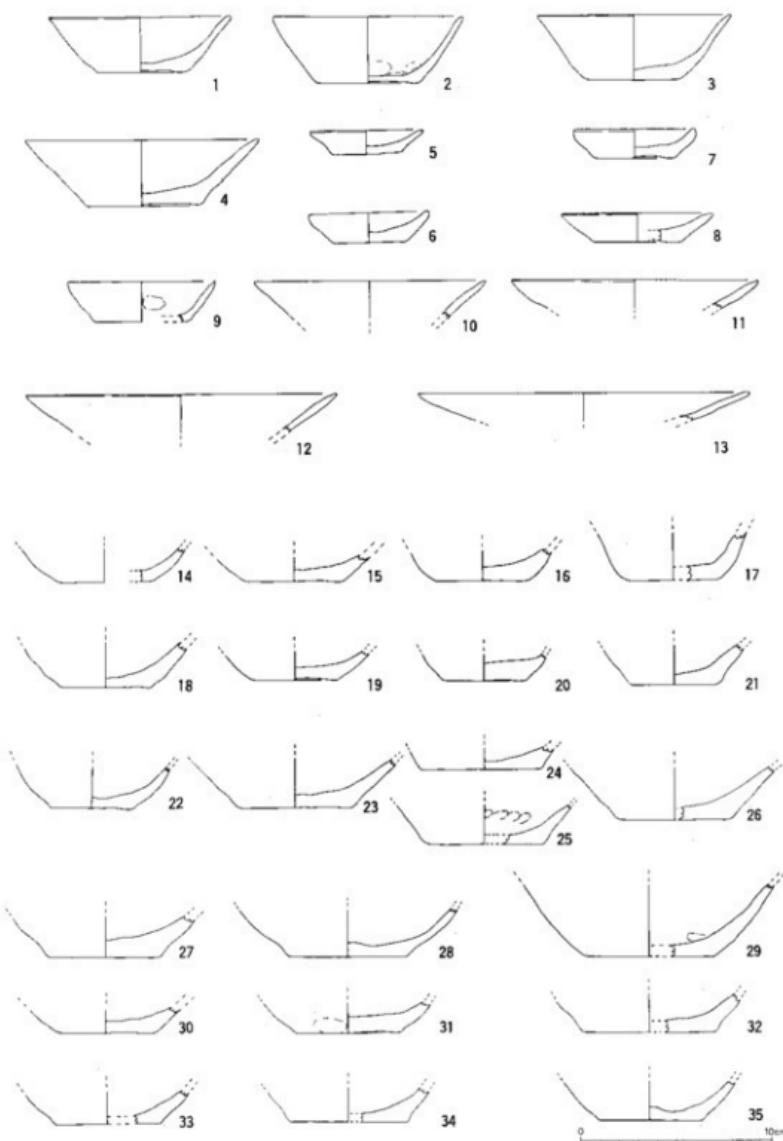
Gトレンチ第11層中から出土した。赤褐色の砂岩製砥石であり、使用痕をもつ。

##### 臼 (図107・108)

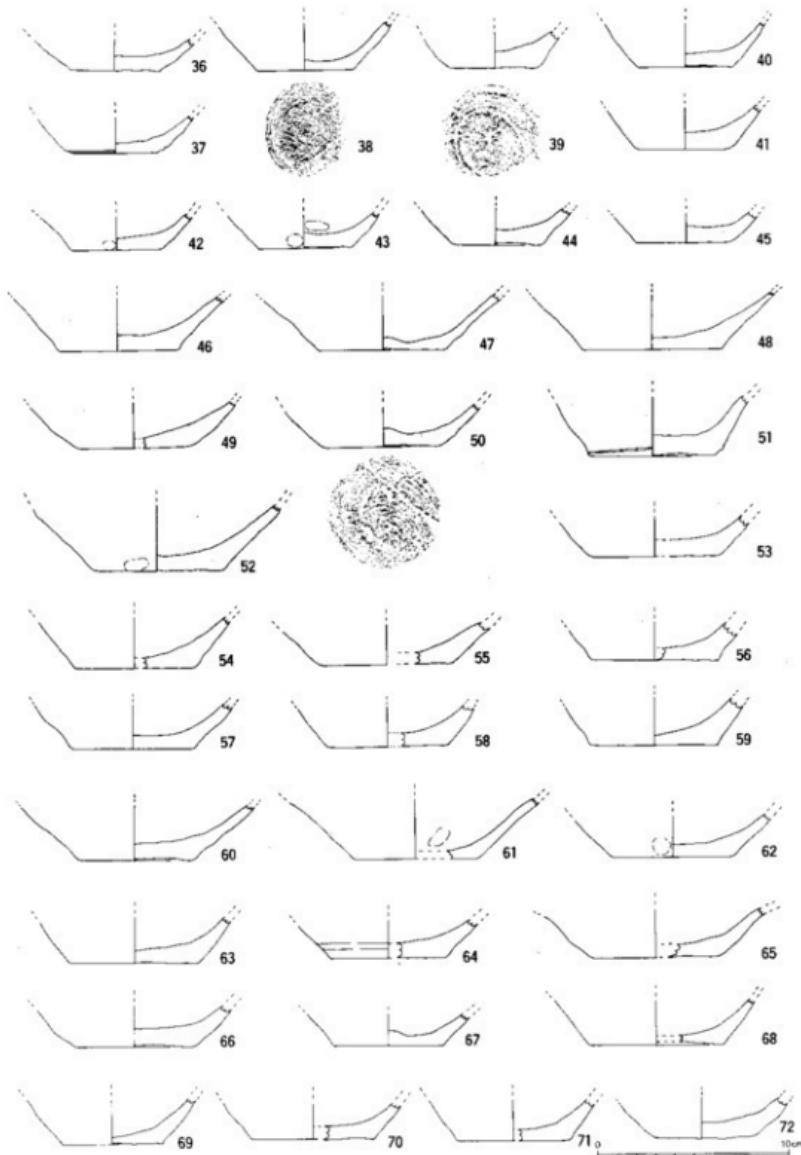
108は石臼で、Aトレンチ石垣遺構上の集石部から出土した。また、107は茶臼で、大谷地区の3トレンチ北側で出土した。



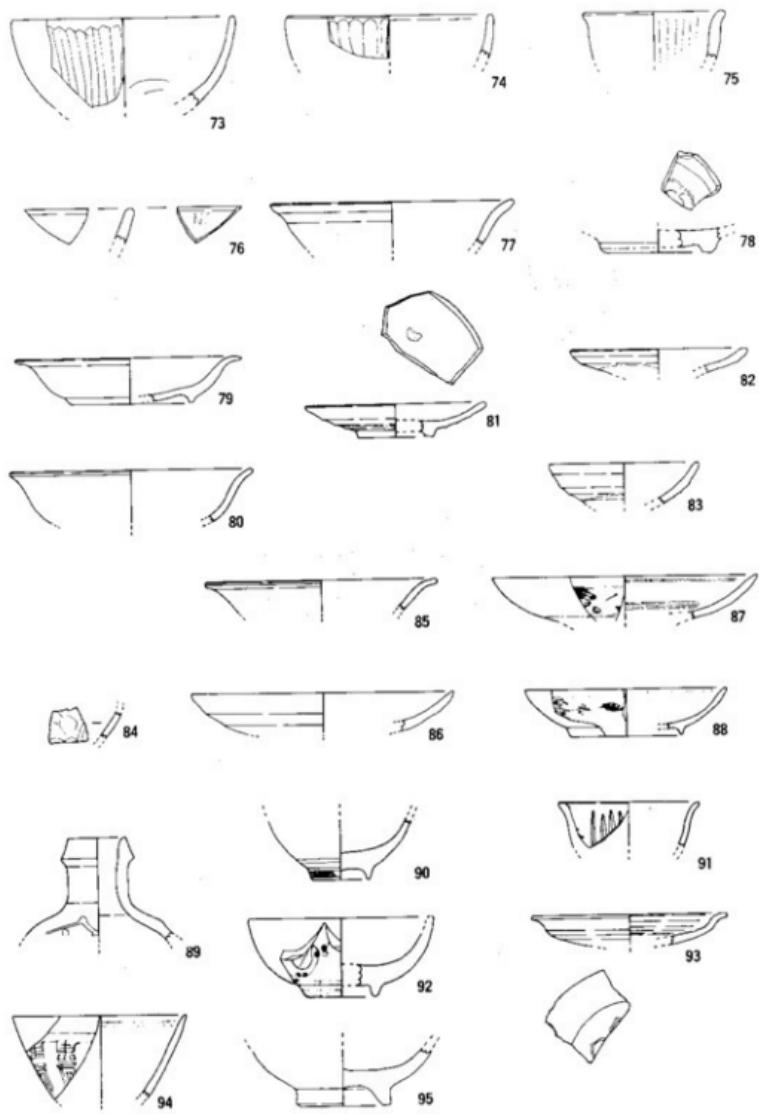
第13図 Aトレンチ遺構配置図



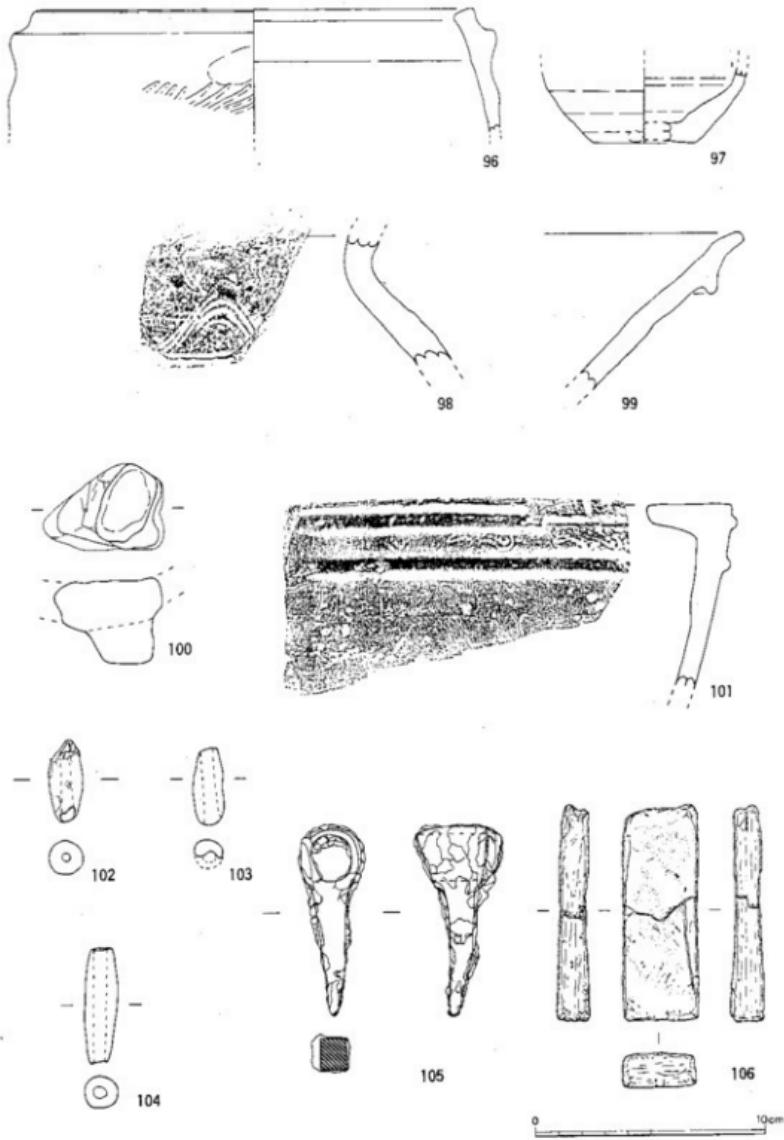
第14図 出土遺物実測図 1



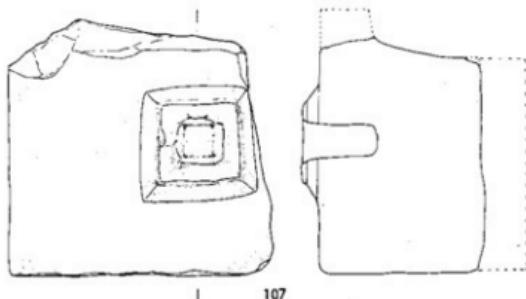
第15図 出土遺物実測図 2



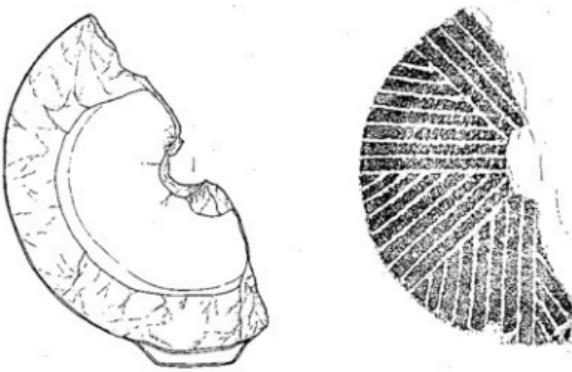
第16図 出土遺物実測図 3



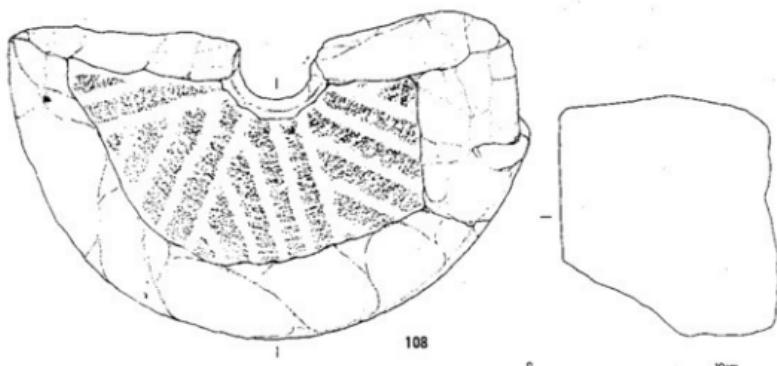
第17図 出土遺物実測図 4



1 107



1



108

0 10cm

第18図 出土遺物実測図 5

## V ま　と　め

今回の発掘調査において、土居ノ谷地区から石垣遺構、桂穴、石組遺構、土壘状遺構を検出することができた。また、大谷地区からは、土師質土器片及び茶臼が出土し、遺構及び遺物包含層は検出されなかったものの、周辺に中世の遺構が形成されている可能性がうかがわれた。調査で得られた成果と、今後の問題点にふれてまとめとしたい。

### 土居ノ谷地区

- (1) 調査対象地に、AトレンチからNトレンチまでの計14ヵ所の発掘区を設定して調査を実施した結果、Aトレンチ及びCトレンチにおいて中世の遺構を検出することができた。
- (2) 検出された遺構は、土師質土器、輸入陶磁器（青磁、白磁、青白磁）等の出土遺物の内容から、戦国時代に形成された遺構であることが判明した。また、調査対象地の土地の小字名が、城主の屋敷跡を意味する「土居」の名称を持ち、調査地点は城跡の西側に隣接した谷間に位置することから、検出された遺構は城跡の土居に関連する遺構で、吉良氏屋敷跡の一部であると考えられる。
- (3) 検出遺構は、調査対象地の北側に形成されているもので、その内容は石垣遺構・石組遺構・土壘状遺構である。石垣遺構の周辺には、桂穴跡及び礎石状の板石が検出され、周囲に建物址が存在していたことが考えられる。また、石組遺構は、谷地形の傾斜口に位置しており、谷への排水機能をもった施設であったことが明らかとなった。なお、土壘状遺構は、土壘状の整地土の基底部にあたるもので、トレンチの土層断面観察によって確認されたものである。この土壘状遺構の性格については、明確にすることはできなかったが、遺構が形成されている場所は谷地形の肩口であり、谷地形を意識して構築されたものと考えられる。
- (4) 石垣遺構が検出されたAトレンチ北側は、調査対象地の北東部に位置し、丘陵の東斜面に接している。石垣遺構が構築された目的及び石垣遺構の性格について、具体的に説明することは、資料的な制約もあり難しいが、山際を削平して平坦地化し、石垣を築いて補強していることから、石垣遺構によって区画された平坦な壇状地形に何らかの施設が築かれていた可能性がある。石垣遺構に接して、桂穴跡及び礎石状の板石が検出されたことからも、石垣遺構上に櫓等の建築物が建てられていた可能性が指摘されよう。
- (5) Aトレンチ及びGトレンチから出土した土師質土器及び輸入陶磁器は、遺物の内容からみて、15世紀後半～16世紀前半に属するものと考えられる。昭和59年度に調査が行われた吉良城跡の詰部からの出土遺物や、今回の調査対象地の南側において昭和60年度に実施された発掘調査時<sup>(1)</sup>の出土遺物からは、16世紀前半に属する遺物が出土しており、出土遺物をさらに詳細に検討することによって、今後、吉良城跡の変遷の内容について具体的に明らかにすることが可能になるものと考えられる。  
<sup>(2)</sup>
- (6) C、N、M、Gの各トレンチの土層断面の観察から、調査対象地の旧地形は東へ傾斜する谷

地形であったことがうかがわれ、堆積土に含まれる遺物から、戦国時代以前はかなり奥ゆきの深い谷地形が存在していたことが判明した。また、旧地形を復元すれば、Aトレンチで検出された石垣遺構等は、谷入口部から見て約8~10m程高所に位置していたことが考えられる。

#### 大谷地区

- (1) 調査対象地に、1~4までの計4ヵ所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。各トレンチの土層序は、自然流路及び旧河床の堆積土を呈しており、旧地形は谷筋であったことが判明した。
- (2) 遺構等の検出はみられなかったが、中世に属する遺物（茶臼、土師質土器片）が3トレンチから出土しており、発掘区の周辺に遺構が存在している可能性が考えられる。

註 (1)『吉良城跡Ⅰ』春野町教育委員会 1985 3月

(2)『吉良城跡Ⅱ』春野町教育委員会 1986 3月

# 図 版



土居ノ谷地区遠景（北から）



土居ノ谷地区遠景（北から 谷奥部から南を望む）



トレンチ設定期況（北東から）



同上（E～G トレンチ 南東から）



E トレンチ (南から)



F トレンチ (北西から)

PL. 4



G トレンチ (北西から)



G トレンチ (南西から)



H トレンチ (南東から)



I トレンチ (南東から)



G トレンチ北壁 遺物出土状態



J トレンチ (北西から)



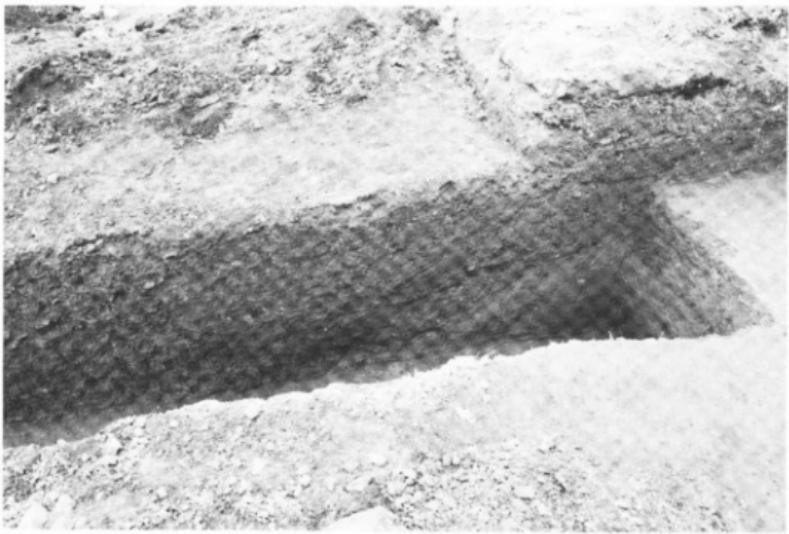
K トレンチ（北東から）



K トレンチ（東から）



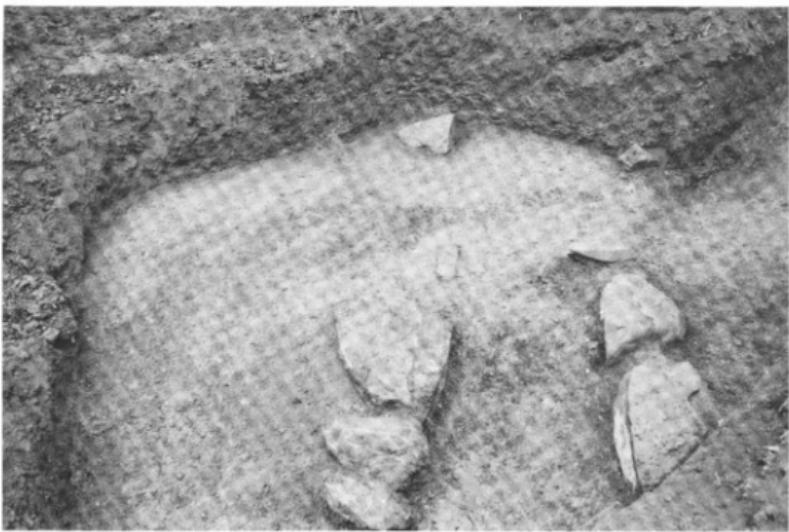
C及びNトレンチ（南東から）



Nトレンチ南壁



A トレンチ 石組造構（北西から）



同 上（南から）



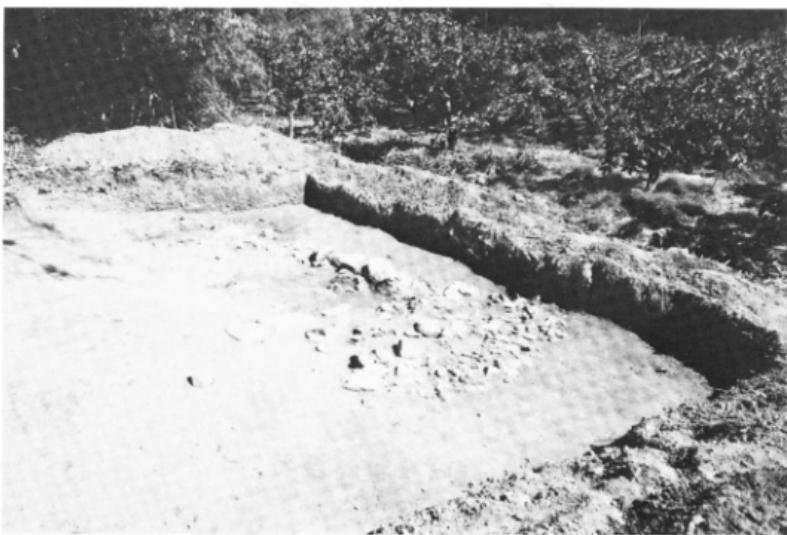
A トレンチ 石組遺構（西から）



同 上（東から）



A トレンチ 石垣遺構検出状態（南西から）



同 上（西から）



石垣造構検出状態（北東から）



同上（西から）



A トレンチ 石垣遺構上集石状態（南東から）



同 上（東から）



石垣遺構（南から）



同 上



ピット検出状態（南から）



同上（東から）



A トレンチ ピット検出状態（北東から）



A トレンチ東壁（北から）



A トレンチ 完掘状態（北から）



A トレンチ 石垣遺構北側（東から）



大谷地区遠景（北東から）



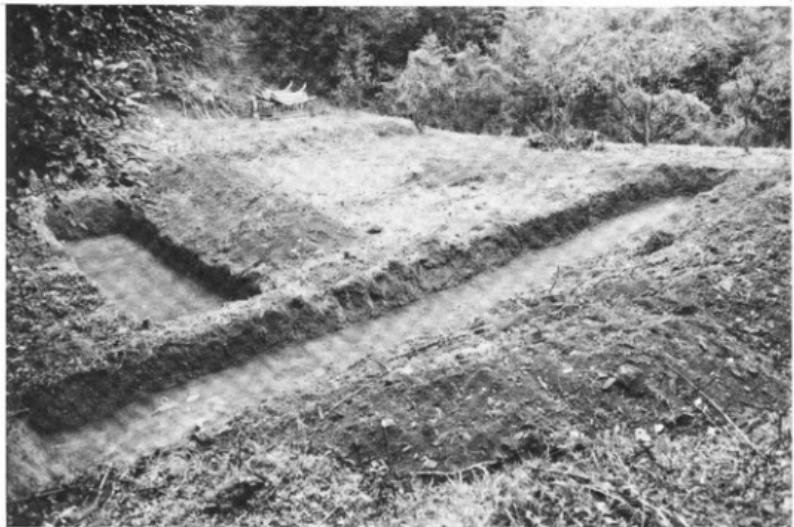
調査区近景（北西から）



1 トレンチ (北から)



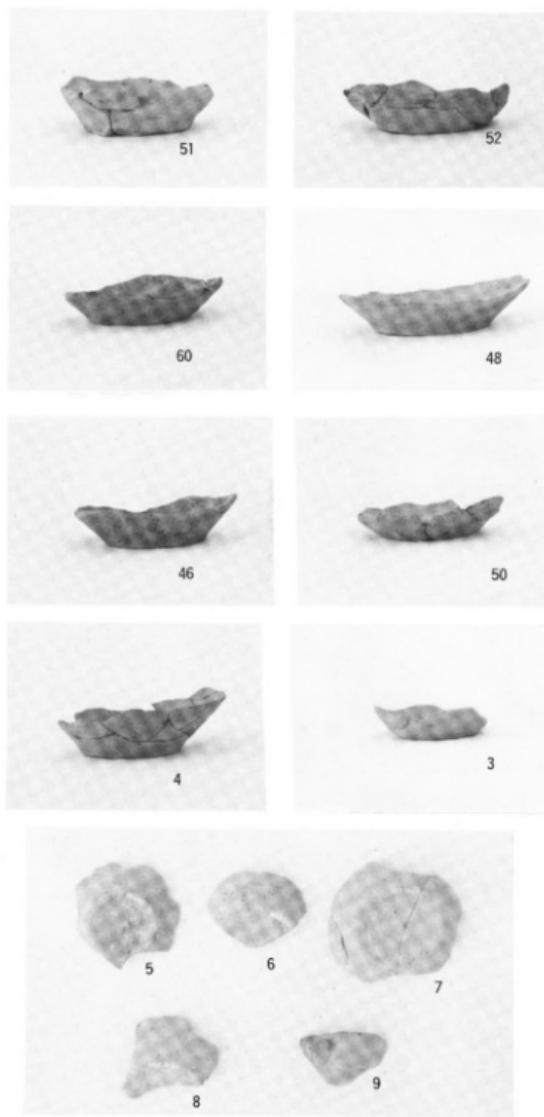
2 トレンチ (東から)



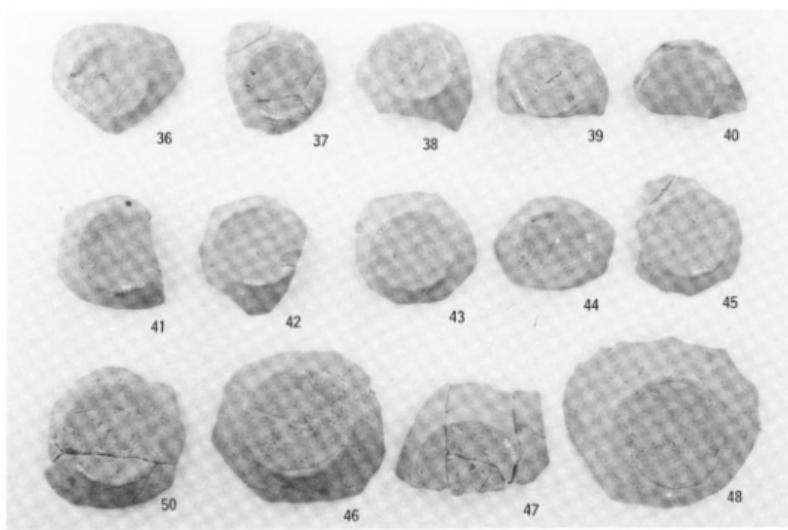
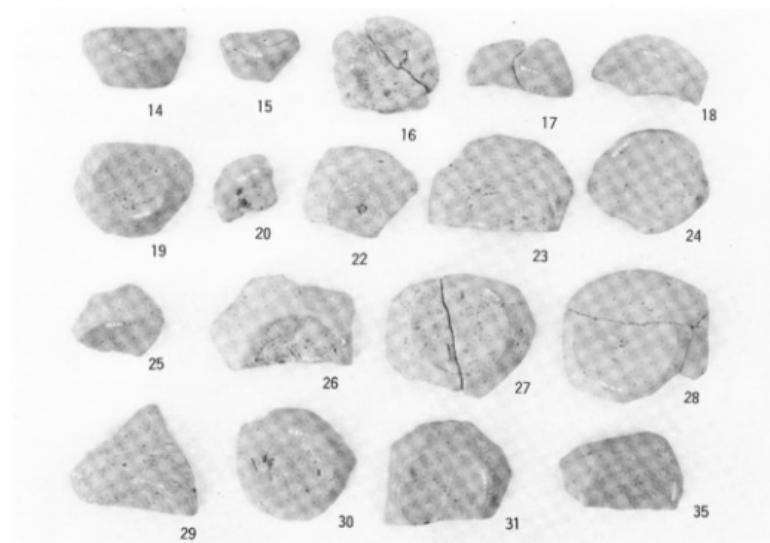
3 及び 4 トレンチ (北西から)



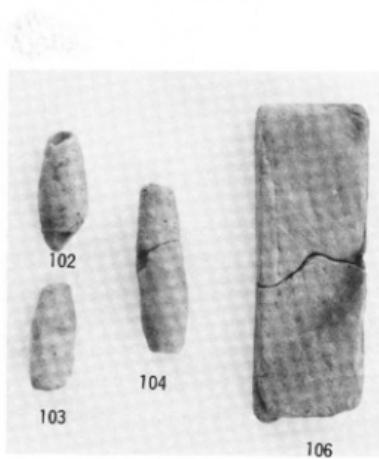
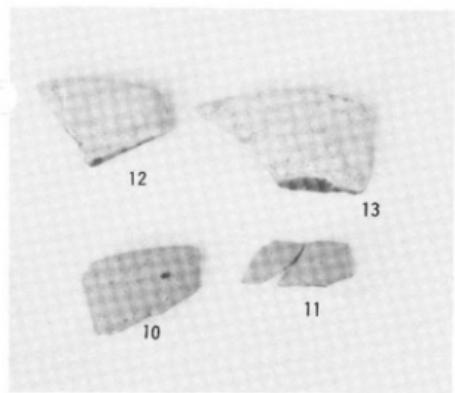
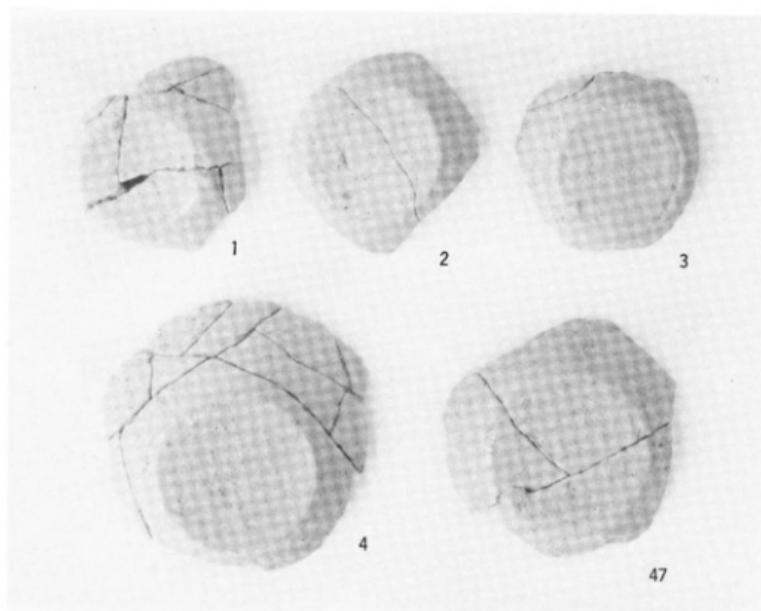
3 トレンチ 茶臼出土状態 (南東から)



出土遺物（土師質土器）



出土遺物（土師質土器）



出土遺物 (土師質土器、土錘、砥石)